

第10回までの自治推進委員会委員意見

<第10回の意見>

○地域コミュニティのつながりについて

- ・有機的連帯を好む都市化した社会において、昔のような協働が根付いていた機械的連帯に戻れるか。理想が高いのではないか。
- ・組織形態が確立されていることから、命令されればやるといった地域もある。

○地域コミュニティ活動と市民公益活動の関係について

- ・地域での協働と市民公益団体の協働は分けて考える必要があるのではないか。それぞれが有機的につながればより深い協働ができるのではないか。
 - ・狭いコミュニティの中で隣人や他者への共感・関心について維持していかなければならないという問題と具体的な社会問題の解決を一緒に考えてはいけないのではないか。
- ⇒まちづくりにおいて、NPOの居所が分からない。好きなことをやる楽しさややりがい~~が~~を原動力~~である~~として専門性を持って活動するNPOと地域団体の活動は性質が異なり、どのように交わるのか難しい。

○市民公益活動、サークル的活動の可能性について

- ・サークル的な活動がつながって、校区のつながりのようなになればよいのではないか。行政とも役割分担で取り組んでいくことができるのではないか。
 - ・多様性を認め、私的領域と公共的領域が重なる部分での協働を模索していく必要があるのではないか。
 - ・社会全体で見ると、NPOも社会に対して参画し、社会づくりに関わっている。
 - ・ソーシャルビジネスのようにお金を儲けたり、自由度の高い活動が熊本市にはあっているのではないか。
- ⇒利益を出してよいのはNPO法人も一緒、分配をしてはいけないだけ。自由度だけではなく、楽しさややりがい~~が~~がNPOの活動には重要。
- ・地域の課題に行政としての市全体の課題を示してもらえれば、NPOも課題解決に入っていくやすい。

○ネットワークなどを生かした新しい協働のあり方について

- ・お知らせが自治会長だけに来て止まってしまう。ネットワークを生かした新しい協働の形を模索していく必要がある。何かあればすぐ動けるネットワークを持っている人がいることが重要である。
- ・社会的役割を担う人を輩出できる地域と出来ない地域があるのではないか。
- ・地域の活動に興味を持って入ってくれる方が少ない。

⇒ただ情報提供、啓発するだけでは続かない、そのようなところに NPO などの活動が組み合わさって問題を乗り越えるという方法しか考えられない。

- ・役員などが続かない今、校区を越えた活動ができれば良い。

⇒制度的に校区を超えた活動を保障すると難解なので、地域でアイデアを出してやれると良い。住民がアイデアを出していける領域がある。

- ・若い世代は、身近な地域的つながりよりもネット上のコミュニティなど広いつながりを重視している。しかし、自分が住んでいる地域を盛り上げようという気持ちはあるので、それをうまく生かせないか。
- ・ネットワークを生かし、他の団体とつなげていけるマインドを持った職員がいてくれたら良い。
- ・ライフステージによって、地域に入るという傾向がある。現代の若い世代の生活サイクルも根本的な問題かもしれない。
- ・地域に関わるようになったきっかけが知識として蓄積することが今後の地域づくりに生かされるのではないか。
- ・何かの機会に地域に触れ、学ぶことが、持続的な地域活動につながるのではないか。
- ・大きな目標を共有し、集まる機会、仕組みをつくると、ネットワークが広がりアイデアを出し合い、住民のできる範囲、立場で活動していけるのではないか。

○行政との関係について

- ・情報共有・参画・協働は行政が言い出したことで、行政が責任を持ってやって欲しい。市民に協働を求めるのならば、参画から関わらせるべきだ。
- ・行政の施策と利害を一致させ、力量次第でうまくやれる地域とそうでない地域で差が出てしまうのが現実なのではないか。

<第9回以前の意見>

○地域の防災対策について

〔住民の参加意識について〕

- ・地域の皆さんの関心が高かった。参加の意識が高まっていた。
- ・参加人数が多く、女性が多く入っていてよかった。人口構成を考慮した、参加者の構成が重要だ。
- ・たくさんの分野の方が参加されると、それだけ地域の問題も見えてくるのではないかと実感した。
- ・新しい住民をどのように巻き込むかが課題。
- ・行政からの提案、呼びかけに対して、役割として参加するのではなく、目的を共有

し、危機感を持って主体的に参加しているところが良かった。大江で参画・協働で取り組むことに、ハザードマップ作成ということが合っていたのだと感じた。地域力をつけるために良いテーマであった。

- ・行政主導の活動に終わらないように、自分の課題を整理してから参加する必要がある。自己検証、自分のこととして考えさせる仕組みが必要。

〔行政の対応について〕

- ・説明資料が事前勉強会で住民の方の意見交換をしながら作った資料ならばよかった。
- ・行政で持っている防災マップや資料等を見せたり、地勢など分かっている専門家を入れることもあってもよいのではないか。
- ・住民参加の効果として、住民自らが学んで経験を得るところにあるのかと感じた。
- ・地域の方と語り合える職員が出ている。このような活動を他の分野でも起こして欲しい。

〔取り組みの広がりについて〕

- ・このような小さい単位の取り組みが校区全体に広がるようにするべきだと感じた。その後のフォローが必要。
- ・行政と市民が、課題に対してどちらが解決すべきか考え、みんなでまちを守っていくということや、我が家に持ち帰り、家族で危険箇所について語り合うことも必要。自分がどう動くか考えることができる取り組みにしていくと良いのではないか。
- ・中央区の職員や危機管理防災総室の方もサポートされ、このように協働して取り組めたことは、次の取り組みにつながるよい機会だと感じた。

〔防災について〕

- ・高齢者、障がい者など福祉を要する方の情報をつかむことが難しく、個人情報保護に関しても考える必要がある。
- ・地震なども想定した取り組み、災害弱者への配慮など、広い視点で考える必要がある。
- ・行政はもっと他の地域に啓発する必要がある。

○地域の健康づくりについて（健康まちづくり）

〔住民の参加意識について〕

- ・住民が自分の問題として情報をキャッチできている。

〔コミュニティについて〕

- ・松尾北校区は、一世帯にひとつの役割があって、理想的に感じた。このような成功

している地域の事例を報告すると、もっと人付き合いの必要性が高まるのではないか。

- ・松尾北校区のような皆が参加できる会議が理想的だと感じた。
- ・松尾北校区には、コミュニティが持続するメカニズムがあるのではないか。
- ・役員だけの活動に留まらず、地域の健康を住民が自覚できる機会になっていた。

〔健康まちづくりについて〕

- ・ひとつの分野から一体的に政策を考えるという要素が健康まちづくりには見られる。

○地域のまちづくり全体に言えること

〔地域のまちづくりについて〕

- ・上からの指揮系統でまちづくりをしていくには、普段からの隣近所のつきあいが重要。
- ・ムラ組織が生きているところでは、指揮系統でのまちづくりがうまくいくかもしれないが、そうでない地域もあつたりと熊本市内も様々なのだと感じる。
- ・これからは、地域のつながりだけでなく、別のつながりでこのようなことも考えていく必要があるのではないか。

〔情報共有・広報活動について〕

- ・フェイスブックの活用は、各区特徴的だが、もっと事業のバックグラウンドを示すなど強化する必要がある。
- ・フェイスブックのトップ賞を設けてはどうか。
- ・広く浅い情報伝達になっている。情報提供のマーケティングが必要。
- ・地域団体にだけお知らせするのではなく、他の団体へも積極的にお知らせすることで、情報を広げていく必要がある。
- ・情報発信で、全国から課題解決する人を集める仕組みもある。

○参画・協働の推進、マネジメントに関すること

- ・市民の知恵と行政を結びつけるプラットフォームの役割が市民協働課に必要。